

自分を超える方法

NO ノーリミット LIMIT

栗城史多

s
a
n
c
t
u
a
r
y

b
o
o
k
s



あなたにとっての、山はなんですか？





僕は今、生きています。





小さな体で一人。

ビデオカメラを片手に

巨大な山に向かっていく。

上がったたり、下がったりをくり返しながら

少しずつ、少しずつ頂上をめざす。



た! やばい!

ら下がってます。

ー、ホォー、

かなー
ドダスト
ダスト

美いるね

ありがとう

なだれ来た

えー、いま、氷河にぶ

シー シー ホー ホー
ハア ハア ハア

すごい景色 見えるか
見えますか? ダイヤモンド

超巨大なダイヤモンド

でっかい
神様

すごいな

光を送りますがんばって。
幼い頃から障害を持った私には
激しい運動はできません。
でも栗城さんが登頂したら
もう逃げる人生をやめます。
祈りよ届け。

～ブログのコメントより～

栗城くんに出会って、辛いことや苦しいことも
全部ひっくるめて「生きてる」ってことなんだって、
考えられるようになった気がします。
今は栗城くんを遠くから応援することしかできないけど、
がんばって苦しみを乗り越えて、てっぺんに立って、
無事に帰ってきてください。
遠い日本から祈っています。



「右手が凍傷になってしまいました。

あとすこしなんですけど。距離そんなにあるかなー。

こっから見てるとあと3時間くらいで

行けそうな気がするんだけど」

「3時間では行けません。生きて帰ることを考えてください」

「下りるべきか、行くべきか迷っています。行きたいです」

「安全に下山できる保証はありません。引き返すなら今です」

「僕のわがままだけど、ちょっとだけ行ったら、下山します」

A person in dark climbing gear is seen from behind, standing on a snow-covered mountain ridge. The background is a vast, snow-covered mountain range under a clear sky. The scene is captured in a monochromatic blue color scheme.

「ちょっとというのはどれくらいですか？」

「太陽が出てきてあつたかくなってきたので、もうすこし行けると思います」

「登山も中継も生きてこそでしょ。」

もし帰ってこれなくなったらどうするんですか。

何回でも手伝うから、お願いだから下りてください」

「だめですか？」

「栗城君。頼むから下りてきてください」

「ごめん。ありがとう。」

下ります。

あとすこしだったんだけどな。

太陽がくれちゃった。

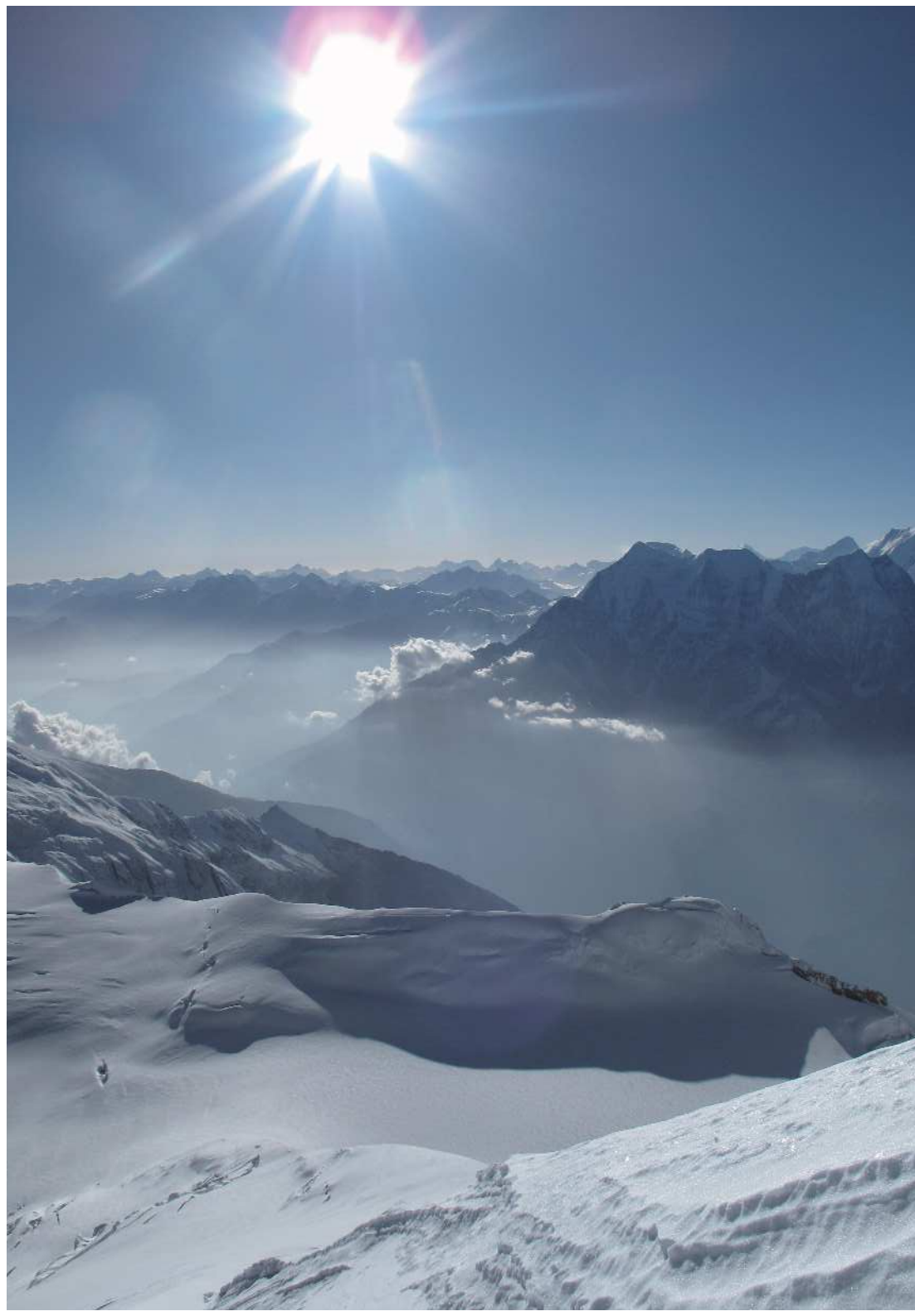
もう行くなっていったんのかな。

むずかしいね。

あとちょっとだったんだけどね。

でも、みんなに感謝です」





僕は今、生きています。

NO LIMIT

INTRODUCTION

朝を迎える。

目の前に大きな山がある。

山はとても冷たい。心も体もすべてを迎える状態にしなければいけない。

でも今の僕は力が半減している。

泣いても何をしていても状況は変わらない。

もうすぐモンズーンが明ける。

モンズーンが明けると、秋の冷たい風が下りてきて

一気に気圧が下がっていく。気圧が下がると空気中の酸素も低くなる。

無酸素でエベレストを登るためには、

気圧が高くて、酸素が濃いときまでに登らなければいけない。

自然界にも時間切れがあるのだ。

4日分の荷物を運ぶのだが、ザックを背負った瞬間に自分の調子がよくわかる。

登頂どころか、無事に帰るだけでも厳しいかもしれない。

天候もよく、順調に高度を上げていく。

しかし気圧の見えない壁を感じていた。

7500メートル地点。エベレストの夢。ついに夢を実現する瞬間がきた。

山頂までまだ1300メートルもあるが、天候は決して悪くない。

ここまでたどりつくのにどれだけ長い道を歩き、深い雪をかきわけてきたのだろう。資金作りや、インターネット中継の準備。

うしろを振り向けば、日本から続く長い自分の足跡が見えそうだった。

ついに山の上部が目の前に見え始め、あれだけ遠く感じられた山も今は近く感じる。

7500メートルから先は、デスゾーン（死の地帯）と呼ばれ、酸素濃度が地上の3分の1になる、生命の存在を感じさせない場所。本来は、人間が入ってはいけない世界なのかもしれない。

無線で目を覚ます。

風は強く、自分のテントが軽く宙に浮くような感じがした。

傾斜が強いところに無理やりテントを張ったのだが、ポール2本だけのテントで、よく一晚を過ごせたものだ。

SPO₂（血中酸素濃度）は57%。

体に酸素は行き渡っておらず、手も足も思うように動かない。

とにかくもっと寝ていたい。

ヒマラヤでの行動には強い意志が不可欠だが、必要な力はそれだけじゃない気がする。

強風の中、7000メートル級の山々が眼下に見え、濃く青い空が広がる。

僕はこんなところを本当に歩いていいのだろうか。

生命の居ない場所に、自分が存在していることが奇跡に思える。

いったい何メートル進んだのだろう。

目的の岩が見えるが、体は思うように進まない。

いや、時間も空間もすべてがスローモーションだ。

雪は深く、突然、大自然の中に体が沈みかけていく。

それでも体を前に持っていく。意志だけが、自分の体を前に引っ張っていく。

こんなに自分の体は重かっただろうか。空間も体もすべてが止まり始めた。

タイミングが悪いことに、腕時計の電池がなくなっていた。

ベースキャンプにいる仲間無線で時間を聞くが、自分がいつどこで何をしているのかわからなくなってきた。ただ、あの奥にある岩の部分に行かなければ、すべては始まらない。それだけは知っていた。

夕方5時。

太陽が上ではなく、横にきていることに気づいた。

あと1時間もすれば目的の岩につくだろう。

しかし、進んでも進んでも近づかない。

「引き返した方がいいです」という無線が入る。

ベースキャンプにいる人間が、望遠レンズで距離を測る。

「横180メートル縦100メートル。夕暮れまでには間に合いません」

僕は何度も距離の測定をお願いした。

目の前に見えるのに、そんなに距離があるものか。

しかし太陽はもう横ではなく、下に向き、

エベレストを真っ赤に染め始めていた。

「生と死の分岐点です。もう迷わないでください」

副隊長からはじめて「死」という言葉が出てきた。

「二度、^{キャンプ}C2に戻り、体力を回復させて、明日行きましょーう」

と答えたが、しかし、それは嘘だということはすぐに分かる。

^{キャンプ}C2に引き返したとしても、標高は7700メートルもある。

そこで酸素ボンベを持たない僕の体力が回復することはない。

エベレストの単独・無酸素のアタックは1度しかないのだ。

引き返す、ということ。それは「敗退」を意味する。

しかし太陽は沈み、光の世界が闇の世界に切りかわり、

いよいよ手足の感覚がなくなってきた。

本当はもう山に向かえないのを知っていたが、後ろ向きな言葉は発したくなかった。

「^{キャンプ}C2に戻り、明日挑戦します」

そう言いながら涙を流し、来た方に足を向けた。

自分の登ってきたトレース（自分の足跡）を必死に探す。

風が強く、そして夕暮れが視界を奪っていく。

太陽が沈みかけた時、死を感じるようになった。

今までの夢であった「冒険の共有」もできなくなり、

登山というものに意味を見出せなくなっていた。

さらに登頂という希望もなくなった今、

暗闇の中で、自分の終わりを感じていた。

心の灯は消えかけていた。

時間の感覚はなくなり、雪壁に座り込み、何もできない自分がある。

こんなに自分は冷たかったのか。

無線が何度か聞こえてくるが、何を言っているのかわからない。

無線を聞いているうちに、

「生きて帰らなきゃ」という思いが出てきた。

しかし、時間の感覚はわからず、C2^{キャン}への距離が遠いことだけがわかった。

生きて帰りたい。

登ることよりも大切なこと。

僕は無線で「時間を教えてくれ」と頼んだ。

それから10分おきに、仲間の声が聞こえてきた。

「生きてこそそのチャレンジです」

ブログやホームページに届いたメッセージを読みあげてくれる。

「栗城さんが一番不安でしょう」

ただ、ただ安全しか祈りませんが

いまあなたにできることは

無事に下山することです

命あってなんぼです」

「栗城さん、生きているからこそ

次に挑戦できるんですよね

生きて必ず帰ってきてください」

生きて帰る。

生きて帰ります。

ヒマラヤの夜が寒いせいなのか。

どんどん視界は無くなっていき、自分のトレースは完全に消えていた。星が明るくて、このまま星の仲間に入れないだろうかと考え始める。

それでも無線は聞こえてくる。

無線が聞こえるたびに無意識に足を前に出していくが、

一度、急な雪壁に腰をかけるともう立ち上がりたくない。

仲間がいるベースキャンプが、なぜこれほど遠く感じるのだろうか。

目の前に目的地である標高7500メートルのC2があるはずなのに、ほんの1メートルが遠く感じる。

登りのときも遠く感じていたが、帰りはさらに遠く感じている。

突然の嘔吐。

何も食べていないのに嘔吐だけをくり返す。

でも嘔吐をすると、まるで呼吸をしているようで、
まだ生きている感覚がある。

星は僕の目の前にあった。

それは救助でC2キャンに向かっていたシエルパの一人だった。

C2キャンに着いたことを仲間に伝えると、無線の奥で歓声が上がった。
まるで登頂よりも喜んでいるような声だった。

INTRODUCTION

僕はまだ生きている。そして一人じゃない。
仲間がいて、一緒に夢を共有する人がいる。

生きているからこそチャレンジができる。

ただ、今は命がけの登山よりも、

こうして仲間と語り合い、生きていることに感謝だ。

消えかかった心の灯は、

小さいながらも静かに暖かく光り始めている。

そして僕は、決してあきらめない。